世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

〈書評〉長谷川匡俊著『近世浄土宗・時宗檀林史の研究』（法藏館、二〇二〇年）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古賀, 克彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1724

〈書　評〉長谷川匡俊著『近世浄土宗・時宗檀林史の研究』（法藏館、二〇二〇年）

古賀克彦

著者[1]は日本（仏教）社会福祉史の泰斗であり、また、自坊が江戸時代に浄土宗関東十八檀林の一、下総国生実大巌寺であることから、該寺に所蔵される史料等を用いて、近世の浄土宗史・房総宗教史・念仏者伝の調査・論文化に努めてきた。今回、それらの謂わば集大成として、表題に掲げた五百頁近くの大著（本文四八八頁・索引九頁）を上梓した（以下、本書と呼ぶ）。本書は真宗を除く、近世関東浄土系教団史の一つの到達点と目される。よって、ここにそれを評し、その意義と課題・展望を述べることとする。

まず目次を掲げる。括弧内は初出年である。原題は省略する。

序

第一部　関東浄土宗教団の末寺統制と地方檀林の歴史的展開

第一章　関東浄土宗教団の末寺統制と学寮運営（一九七四年・一九八五年）

第二章　下総国生実大巌寺檀林の学寮運営と民衆教化（一九七〇年・一九七一年）

第三章　常陸国江戸崎大念寺檀林の学寮運営と民衆教化（一九七四年）

第四章　武蔵国川越蓮馨寺檀林の学寮運営と教育の質をめぐる課題（二〇一六年）
第五章　常陸国瓜連常福寺檀林の学寮運営と本末関係の構造的特質（一九七六年・一九七八年）
補論1　地方檀林の経営体質をめぐる基礎情報―四檀林の所蔵史料から―（一九七二年）
補論2　檀林教育における法問と講釈（一九八八年）
第二部　檀林修学者の「入寺帳」の分析からみえてくるもの
第一章　増上寺所蔵『入寺帳』と修学者数の動向（一九八二年・一九八三年・一九八四年）
第二章　光明寺所蔵『入寺帳』の分析からみた地方檀林の実況（一九七五年）
第三章　名越派二檀林の実況―江戸後期「入寺帳」の分析を通して―（一九九三年）
第三部　時宗の学寮
第一章　学寮の設置と「大衆帳」からみえてくるもの（一九八二年・一九七四年）
第二章　学寮生活と僧侶の資格・昇進（一九八二年・一九七四年）
付録　史料紹介（「学寮条目」「両本山条目」。一九七四年）
結語

第一部は約二八六頁、第二部は約一一六頁、第三部は約六三頁、よって第一部に最も比重がある。論稿の多くは七〇・八〇年代を初出とするもので、九〇年代や二十一世紀になってからのものは、それぞれ一篇ずつである。だが、特に内容的に古さを感じるものは少ない。それは、近世仏教史研究の大家である圭室文雄氏の手法と同じく、膨大な史料から要点をグラフで数量化・可視化している為であろうと考えられる。

さて、ここで云う、「浄土宗関東十八檀林」とは、本書「序」等によれば、関東にある浄土宗白旗派の十八

か所の学問所で、後に僧侶の養成機関となったものである。芝増上寺・小石川伝通院・下谷幡随院・深川霊巌寺・本所霊山寺（以上江戸）、岩槻浄国寺（武蔵）、滝山大善寺（武蔵八王子）、鴻巣勝願寺（武蔵）、川越蓮馨寺（武蔵）、鎌倉光明寺（相模）、瓜連常福寺（常陸）、江戸崎大念寺（常陸）、飯沼弘経寺（下総）、結城弘経寺（下総）、小金東漸寺（下総）、生実大巌寺（下総）、新田大光院（上野太田）、館林善導寺（上野）の称で、その内、江戸に所在する五カ寺を府内（江戸）檀林といい、それ以外の十三檀林を田舎檀林と称して区別した。

本書では特に第一部で田舎檀林について考察し、第二部で江戸檀林中、その首座である増上寺と田舎檀林の中でも江戸に近く、田舎という語にはそぐわない鎌倉光明寺、及び名越派二檀林の入寺帳を考察している。第三部は文字通り、時宗の学寮を考察している。書名には「時宗檀林」と出るが、中身は「時宗学寮」である。これについては後述する。

同書の「序」を元に、各部各章の概要を約言すれば、以下のようである。

第一部第一章では、関東十八檀林を中核とした関東浄土宗教団における本末組織の成立過程とその意味を問い、檀林による末寺統制と学寮運営との構造的な特質を明らかにしている。

第二章では、大巌寺檀林の江戸後期における実況、寺領農民の保護と統制、現世利益を含む民衆教化の諸相の分析をおこない、檀林を経営する住職の能化意識と教化姿勢などを検討している。

第三章では、大念寺檀林について、その草創から幕末・近代初頭の経営危機に至る歴史的変遷と、江戸中期以降における学寮・所化在籍の状況、寺領経営と門前支配、年中行事と学事暦、教育の実態、民衆教化の諸相等を明らかにしている。

第四章では、蓮馨寺檀林の運営と教育の実態について、江戸中期のおよそ四十年間の、学寮数と所化数、学事暦、学寮の経営、末寺住職の選任と学寮の関係等の諸問題から、田舎檀林の実態と構造的弱点を解明している。

第五章では、常福寺檀林における学寮運営と本末関係との構造的つながりや水戸藩の学問奨励策と藩内諸宗檀林の動向について見届けている。

補論1は、特に寺領経営、檀林財政、檀林およびその末寺・支配寺の住職に関する規格、末寺の窮乏、住職の質の低下と綱紀粛正等について資史料を提示している。なお、副題にある「四檀林」とは、「増上寺を除いて、常陸江戸崎大念寺・武蔵岩槻浄国寺・下総結城弘経寺・下総生実大巌寺の四カ寺であり、いずれも田舎香衣檀林である」との記述がある（同書二一五頁）。

補論2では、檀林教育にとって重要な法問と講釈の種類や位置づけ、執行方法、法問の内容等を明らかにする一方、時代の推移により学事停滞等、檀林風儀が衰微していく状況を見届けている。

第二部第一章では、増上寺所蔵「入寺帳」の遺存状況を提げて入寺（修学）制度の概要を示し、「入寺帳」を使用して増上寺ならびに江戸檀林、そして田舎檀林の「年次（月）別入寺状況一覧」を作成し、入寺者数の傾向を読み取っている。

第二章では、鎌倉光明寺所蔵『入寺帳』を数量的に分析している。

第三章では、「名越派」専称寺・円通寺両檀林の実況について、『入寺帳』を使って入寺動向等を分析し、併せて名越派檀林の特徴を探っている。

第三部第一章では、時宗学寮（藤沢・京都七条・浅草）の設置の時期や経緯、本山との関係、僧侶の学籍簿である「大衆帳」の記載例を示し、その分析を通して学寮の実態に迫っている。

第二章では、各宗における入寺の条件を『諸宗階級』により確認し、学寮生活の諸相を明らかにし、学寮間の転籍の状況、四条派（金蓮寺）所化の遊行派（藤沢学寮）への受け入れ要請とその背景を探る（ここで留意すべきは、相模藤沢清浄光寺であって、四条道場金蓮寺近隣の七条道場金光寺ではない事であろう）。最後に

延享五年の「学寮条目」と「両本山条目」を使用して時宗僧侶の位階昇進ならびに住持成（住職に成ること）の制度を確認している。

巻末の史料紹介は、第三部第二章で用いた甲府一蓮寺所蔵『学寮条目』と『両本山条目』を掲載している。著者にとって、時宗学寮史研究の事始めに相当する出会いとなった史料、だそうである。

では本書の内容について若干の考察を述べていこう。本書の意義は、京都・江戸の首都におけるそれではなく、地方の田舎檀林を主眼としている所にある。勿論、同じ文脈で、規模の圧倒的に小さい時宗を採り上げた所もそうであろう。

第一部では、依拠した主たる史料として各寺院の『日鑑』を挙げ、著者自身が翻刻に携わった自坊の生実大巌寺[2]と岩槻浄国寺[3]については刊行が完了しており、増上寺[4]、川越蓮馨寺[5]、江戸崎大念寺[6]については刊行中である、としている。評者としては、これに加えて、二、三の事例を加えたい。例えば鴻巣勝願寺を例に挙げれば、明和六年（一七六九）一～十二月分の「勝願寺日鑑」が、『鴻巣市史』[7]に収録されている。

また、小金東漸寺には、『日鑑』ではないものの古文書が、『松戸市史』史料篇六「東漸寺史料」[8]に収められており、「檀林関係」の見出しもある。

本書での詳述はないが、飯沼弘経寺については近年、小野威人氏による一連の論稿も発表されている[9]。勿論、小野氏も本書第一部第二章の原型となった論文を参考文献に明示している。

更に言えば、檀林以外の関東有力寺院の史料を用いて自説を補強して貰いたい、との希望もある。例えば、「白龍山（林西寺）日記録」が『越谷市史』[10]に収録されている。

また、東北地方では白河常宣寺の御用留大意[11]が公刊されている。

そして東海地方の大坊、大樹寺に関しても『大樹寺文書』[12]が出版された。

さらに、京都教団、就中、総本山知恩院の『日鑑』[13]を用いれば、対幕府だけでなく、綸旨以外の対朝廷交渉の一端が知れると愚考する。そして、教団内における関東と関西の支配・指揮系統解明の一助となるであろう。

これらの史料にも目配りして頂きながら、著者には是非続編を紡いで戴きたい。いずれにせよ、（近世）浄土宗教団史は、知恩院・増上寺が主要な研究対象であり、従ってそれに関する論稿も多いのが実情である。特に増上寺（および蓮馨寺）に就いては宇高良哲氏の翻刻・研究が光る。だが、こと関東に関しては、増上寺を含む十八檀林を総体として研究し、なかんずく田舎檀林をその中心に据えた事例は、著者を嚆矢として他には類例無く、独壇場といってよいであろう。

第二部では、増上寺と光明寺の『入寺帳』を基に数量的分析を試みている。ただ、本文中に「入寺帳残存状況比較」が掲載されているが（本書二九九～三〇〇頁）、余りにも字が小さく、これならば判型をA五判ではなくB五判にするなり、この箇所は拡大して折り込みにする等の方途で読者の便に供するべきだったのではないか、と思われた（無論、コストの問題も存するが）。また、表組は縦書きでは無く、横書きが見やすいとも愚考する。僅かな瑕疵ではあるが、気になった点である。本文に「「入寺帳」のデータベース化が進められている」との記述もあるので、今後に期待する。

なお、章題ならび本文中に、『入寺帳』と「入寺帳」の表記が混在しているが、評者には、その弁別がよくわからなかった。ではあるが、何よりも膨大なデータを数量化する試みが、人文科学分野においても必須となりうる現在の学界状況に先んじて、既に七〇年代から地道な入力作業を緻密に、そして着実に取り組んで来られた著者の作業に敬意を表したい。

第三部について。本部のタイトルは「時宗の学寮」でありながら、書名には「時宗檀林」とあることにまず留意しなければならないだろう。そして、同書の「序」では、「時宗学寮の研究が進展しているようにもみえ

ない」とあるが、確かにその通りである。七〇年代には既に、大橋俊雄氏の諸論考[14]があったが、その後はどうであったろうか。八〇年代には「大正初期の宗学林物語」という貴重な証言の発表もあったが[15]、九〇年代の『時宗入門』[16]には「学寮制度の設立」の項があるものの、入門書という位置づけの為か、分量的にはけっして多くはない。

二一世紀に入ってからの刊行物である、高野修氏『時宗教団史』[17]、『清浄光寺史』[18]には、近世の教育については詳述されていないものの、辛うじて後者には言及がある。そして近年では長澤昌幸氏『一遍仏教と時宗教団』[19]が出版され、そこには「席講典籍一覧」の表が載っており、本書第三部第一章・第二章の原型となった論文を参考文献に明示している。この作表や分析も長谷川氏の研究手法を援用していると考えられる。長谷川氏の先駆的業績が、後代や他宗の研究に影響を与えている証左の一端となろう。

本書でもこの長澤著作には言及がある。今後、期待されるべき事は、長谷川氏も長澤氏も、共に史料として用いた「大衆帳」の全面翻刻である。今回、付録として「史料紹介」にそれが加えてあれば（分量の関係もあろうが）、文字通り、更に洛陽の紙価は高まったであろう。

問題点としては、先述したが、浄土宗教団においては檀林制度が確立し機能していたことが第一部・第二部からも読み取れるが、時宗の場合は近世における用語はあくまでも「学寮」であり、「檀林」と呼称するのは近代に入ってからである。その意味では本書の命名も多少は考慮すべきであったか、と思われる。

また、遊行（藤沢）派以外の他派については、四条派への言及はあるものの、関東で言えば当麻派、京都では御影堂・市屋・霊山・国阿の各派の状況も（史料の残存状況もあるだろうが）是非言及して欲しかった。特に当麻派は増上寺との関係が深く、本書のタイトルに合致した内容となる筈である。更に言えば、藤沢・浅草・京七条の立体的な差異をも考察して戴ければ、とも感じた。

最後に、惜しむらくは、「本書のタイトルは「檀林史の研究」であるが、狭義の「檀林教育史」の研究ではない。むしろ「檀林寺院史」の研究と言った方が内容に即しているといえよう。」（本書ii頁）と著者が述べるように、歴史研究者としての著者が上梓した本、という点である。優れた教育者でもある著者の「教育史」の作品も読んでみたい、と痛切に感じた。

註

（1）長谷川匡俊（はせがわまさとし）。出版当時、淑徳大学名誉教授、大乗淑徳学園理事長、長谷川仏教文化研究所所長。浄土宗大巌寺住職。専門分野は日本仏教史・日本社会福祉史・仏教社会福祉。

（2）長谷川匡俊［編］『大巌寺文書』全五巻（大巌寺文化苑出版部、一九六九～七二年）。第四巻を除き「日鑑」を収録している。

（3）『岩槻市史』近世史料編2「浄国寺日鑑」上・中・下（岩槻市役所、一九八一年）。

（4）宇高良哲［編］『増上寺日鑑』（文化書院、二〇〇一年～）。現在、六巻まで刊行。

（5）宇高良哲・粂原恒久［編］『蓮馨寺日鑑』（文化書院、二〇一二年～）。現在、二巻まで刊行。

（6）淑徳大学アーカイブズ［編］『浄土宗関東十八檀林大念寺日鑑』（淑徳大学アーカイブズ、二〇一八年～）。本書刊行時、二巻まで刊行。本書評執筆時現在、四巻まで刊行。

（7）鴻巣市市史編さん調査会［編集］『鴻巣市史』通史編二「近世」（埼玉県鴻巣市、二〇〇四年）。第十一章「寺院と神社」第一節「教団仏教の展開」（重田正夫執筆）。

鴻巣市市史編さん調査会［編集］『鴻巣市史』資料編四「近世二」（埼玉県鴻巣市、一九九六年）。第四章「寺院と神社」第一節「浄土宗檀林勝願寺」（五）日鑑。なお、この日鑑翻刻掲載一つ前の項目「（四）関東十八檀林」には、関連する文書が掲載されている。特に増上寺史料編纂所［編集］『増上寺史料集』第一巻（大本山増上寺［発行］・續群書類從完成會［発売］）所収の「寛文十一年（一六六一）正月　関東諸檀林掟書」を収載しており、そこには名越派の大沢円通寺（栃木県）と山崎専称寺（福島県）も連署している（浅草霊山寺は当時中絶）。綸旨およびその添［副］状に関する条文が「拾七箇条」

中の四条に見られる。

(8) 松戸市史編さん委員会［編集］『松戸市史』史料篇六「東漸寺史料」（松戸市立図書館、一九九四年）。

(9) 小野威人「江戸時代における浄土宗檀林寺院の人事異動―浄土宗紫衣檀林下総国飯沼弘経寺を例にして―」（『茨城史学』五〇号、茨城県学校教育研究会歴史部、二〇一五年）

同「江戸時代以前の下総国飯沼弘経寺に関する一考察―天正・慶長年間（一五七三～一六一四年）の動向を含めて―」（『上越社会研究』三一号、上越教育大学社会科教育学会、二〇一六年）

同「資史料紹介　浄土宗旧檀林寺院における本末組織に関する考察―飯沼弘経寺に残る開山忌関連史料から見えてくるもの―」（『頸城野郷土資料室学術研究部　研究紀要』VOL・3／NO・4、二〇一八年）

(10) 安政六年（一八五九）、安政七＝万延元年（一八六〇）、文久四＝元治元年（一八六四）の「白龍山（林西寺）日記録」が『越谷市史』第四巻「史料二」（越谷市役所、一九七二年）に収録されている。但し、見出しが「白龍山日記録」なので、林西寺の日記録とは一見ではわからないのではないだろうか。埼玉県［編集］『新編埼玉県史』資料編一八「中世・近世」宗教（埼玉県、一九八七年）の別冊『県内主要宗教関係既刊史料目録』のリストに「「白竜山日記録（林西寺日鑑）」（『越谷市史』四　史料二所収）」とあったので判明した程である。なお、浄土宗には白旗・藤田・名越の関東三派があったが、この林西寺はもと藤田派であり、その意味でも同寺を採り上げる意義はあろう。但し、それには、同寺に現存する二十九年分はあるという日鑑の翻刻を推進する必要がある。

(11) 足立俊雄『徳川時代末期の地方寺院のありよう』（私家版、一九七三年）で白河常宣寺の文政七～十、安政五～六、文久四年の御用留大意が記載されている。同寺の記録には、遊行上人が一遍ゆかりの白河関滞在時の交流を物語る史料もある。

(12) 岡崎市史料叢書編集委員会［編集］・岡崎古文書研究会［編集協力］『大樹寺文書』上・下（岡崎市、二〇一四・二〇一五年）。下には「日鑑」全十四巻を収録している。

(13) 水野恭一郎・中井真孝［監修］・総本山知恩院史料編纂所［監修・編集］『知恩院史料集』日鑑・書翰篇一～二十、日鑑篇二十一～（総本山知恩院史料編纂所、一九七四年～）。現在、三十三巻まで刊行。

(14) 大橋俊雄「時宗における学寮について―七条道場を中心として―」（『時衆研究』六〇号、時宗文化研究所、一九七四年）、同『一遍と時宗教団』（教育社［歴史新書〈日本史〉一七二］、一九七八年）。

(15) 高田恒阿「大正初期の宗学林物語」（『時宗教学年報』十七輯、時宗教学研究所、一九八九年）。

(16) 時宗教学研究所［編集］『時宗入門』（時宗宗務所、一九九七年）の一「時宗の歴史と文化」には、長島尚道氏執筆の「（九）時宗宗学林」の節があり、そこに「学寮制度の設立」の項がある。

(17) 高野修『時宗教団史―時衆の歴史と文化―』（岩田書院、二〇〇三年）。

(18) 清浄光寺史編集委員会［編集］『清浄光寺史』（藤沢山無量光院清浄光寺（遊行寺）、二〇〇七年）。同書第五章「明治期以降」には、高野修氏執筆の第三節「宗学林の確立」がある。

(19) 長澤昌幸『一遍仏教と時宗教団』（法藏館、二〇一七年）。本紀要前号で書評を試みた。

（武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員、国府台女子学院高等部教諭）